

大江未知、虎岩朋加、前川直哉、教育科学研究会編著（旬報社、2025年）

学校の「男性性」を問う 教室の「あたりまえ」をほぐす理論と実践

黒岩 薫*

本書は、雑誌『教育』2024年11月号の特集に掲載された論考をもとに、議論の積み重ねを経て大幅に加筆されたものであり、学校教育で不可視化されてきた「男性性」を問い直すことを主題としている。副題に掲げられた「教室の『あたりまえ』をほぐす理論と実践」が示すように、本書は単なる実践報告集ではない。現場で経験される違和感や葛藤に対し、ジェンダー研究やフェミニズムの理論がいかに言葉を与えたかが、各執筆者の経験に即して示されている。言い換えれば、教員が自らの経験を捉え直すための語彙として理論が活用されてきたことがうかがえる。各章における理論と実践の接続に加え、序章と第7章は、各章で論じられる実践事例を学校現場に内在する性差別や家父長制の問題として理論的に理解するための枠組みを与えている。このような理論と実践の接続は、本書の大きな特徴であり、意義でもある。

本書は序章を含む全8章と3本のコラムから成る。序章「なぜ『学校の男性性』を問うのか」（前川直哉）では、学校教育において男性性が不可視化されてきた背景と、その不可視化がもたらす問題が整理されている。さらに、「男性性」概念をジェンダー研究の知見とともに説明することで、この概念を本書の視角として用いる意義が提示されている。

第1章『『指導力』という名の教員の『暴力』』（前川直哉）では、教員による暴力について、DV研究などの学術的知見や統計を参照しながらジェンダー視点から検討されている。教員による暴力が「指導力」として正当化される問題と、それにより支配関係が維持されている点が指摘される。

第2章『『男性性』の“くびき”をまなぐす』（大江未知）では、小学校教員であった大江の「心的外傷と回復」の経験が、フェミニズムやジェンダー研究の視点とともに綴られている。例えば、大江

自身による家父長制的な学級づくりへの反省、不可視化されてきた子どもの声を聴くことへの気づき、ケアや脆弱性に目を向けることの意義が率直な語りとともに提示されている。

第3章『『自分らしさ』では届かない場所へ』（星野俊樹×大江未知）では、教室での実践をめぐる対談が記録されている。この章では、競争のなかで疲弊する子どもたちや、教室内で形成される権力関係が、対談者である教師たちの観察を通して示される。また、「自分らしさ」の尊重にとどまらず、社会のあり方、特に不平等な構造に目を向け、それを理解し、変革しうる子どもを育てることの重要性が論じられている。そのうえで星野は、教師の役割として、「性別にとらわれない」かたちで子どもの個を尊重する姿勢と、「あえて性別に目を向ける視点」をもちながらジェンダー平等を目指す姿勢とを、柔軟に切り替えていく必要があると述べる。そして、その視点を与えるものとして、フェミニズムを位置づけている。

第4章「男子の聖域」（福島はなこ）では、男子校で国語科教員として勤務する福島が行った、男子生徒たちが男性性に向き合うための授業実践が報告されている。女性教員に対する呼称などの日常的場面が、女性の客体化やホモソーシャルな連帯の問題を浮かび上がらせるほか、授業実践報告では、生徒にとって受け入れやすい展開を工夫しつつも、男性性の問題を他人事ではなく「自分ごと」として引き寄せて考えさせるための試行錯誤の過程が描かれている。また、授業での対話を通じて、教員自身の認識が更新されていく過程も示されている。福島は、日々の観察と実践を踏まえ、男子生徒が既存の「男性的な」価値観のもとで評価・肯定されることにより、それを内面化・再生産していく構造を指摘している。

第5章「男子校でこそ感情の言語化を」（田中め

* お茶の水女子大学基幹研究院研究員

ぐみ)では、授業内容をどのように構想し、その展開をいかに工夫したのかが具体的に示されている。田中は、生徒たちが他者や社会構造を理解するためには、まず自分自身と向き合うことが必要だと考える。生徒の理解が深まる過程は決して直線的なものではなく、試行錯誤の繰り返しであることが、生徒の様々な反応を通して示される。それでも生徒たちが時間をかけながら、着実に学びや気づきを深めていく様子が記述されている。

第6章「トラブルとしての異性装」(菅野真文)では、高校教員である菅野が、バトラーのジェンダー・パフォーマティヴィティの概念を参照しつつ、自身の経験や「かわいくなりたい」という思いを掘り下げ、その経験を授業実践へと接続していく過程が記述されている。フェミニズムはそれまで菅野が感じていた生きにくさを表現するための言葉を与え、より生きやすくなる契機となったという。そうした経験から、菅野はその価値を生徒に伝えるための授業づくりに取り組むようになる。授業実践と自身の経験に対する深い考察を踏まえ、菅野は、社会の問題をマジョリティが責任をもって引き受けていく必要性を指摘する。

第7章「フェミニズムから『男性性』を問う」(虎岩朋加)では、bell hooksらを参照しながら、学校現場に内在する性差別や家父長制を問い直すための理論的枠組みが提示されている。それまでの各章における実践や教員たちの振り返りにたびたび現れていた家父長制的イデオロギーや思考、そして「学校の『男性性』を問うこと」を理論的に整理することで、本章は実践と理論の接続をより強固なものにしている。さらに、フェミニズムのペダゴジーとして、支配関係への自らの加担を意識化し、行動を起こし、感情に気づいて弱さを受け入れることを提示した上で、これらが本書で紹介された教育実践のなかに見いだされると論じられている。

3本のコラムでは、発達論をジェンダー視点から捉え直す上で必見の関連理論の概説、男子校に勤める女性教員の率直な言葉で綴られた対話の記

録、web アンケート結果の紹介が行われている。いずれのコラムも、ジェンダーやフェミニズムに必ずしもなじみのない読者にとって、学校現場における「男性性」を問い直す最初の一步となるような内容といえる。

以上のように、本書は学校現場に埋め込まれた男性性を多面的な論点から照射する。他方で、評者には、「男性性」という語の用いられ方にはなお検討の余地があるように思われた。序章でも、この概念は執筆者間で必ずしも統一されていないとされているが、そうであるならば、各章において、何が・誰によって・どのような文脈で「男性性」と捉えられているのかを、明確に記述していく必要があったように思える。言い換えれば、ある現象や概念が「男性的」と把握される背景が十分に言語化されないまま、つまり筆者が捉える「男性性」が明確に記述されないまま、議論が進んでいるように読める箇所もみられた。特定の現象や概念を「男性的」と表現すること自体が、かえって男性性を再生産する可能性もあるだろう。本書の狙いは男性性を本質化することではなく、その自明性を問い直すことにあるからこそ、そのような記述を徹底することが重要であると考えられる。

もっとも、この留保を踏まえてもなお、本書の意義は大きい。本書の実践過程の記述に繰り返し示されているように、学校現場に内在する男性性を俎上に載せること自体が、反発や無理解、迷い、試行錯誤を伴う困難な営みである。本書の執筆者たちは、その困難を単なる挫折談として記述するのではなく、ジェンダーやフェミニズムの理論を参照し、同志と対話し、生徒と向き合いながら、問い直すことを諦めない。本書は、学校教育に内在する性差別や家父長制を、理念の次元にとどめず、教師自身の実践の課題として示した点で重要である。理論と実践を往復しながらその課題を可視化した本書は、学校現場でジェンダーの問題に向き合おうとする読者にとって、有力な手がかりであり、実践を支える足場となるだろう。